月例研究会（2024年6月26日）

ポスト戦争体験時代のアルヴァックス

武内　保

戦後80年が経過しようとしている。近い将来，戦争体験者はいなくなり，戦争の記憶を伝える営みはすべて非体験者が担うことになる。こうしたポスト戦争体験時代において，近年ようやく問題化されるようになった復員兵のPTSDとその家族が被るトラウマなどを含めた，戦争記憶の「継承」や「共有」について考えようとするならば，体験者／非体験者や記録／フィクションといった二項対立を捉え直し，記憶をめぐる諸問題を語り直す必要があるだろう。

社会学者モーリス・アルヴァックスは『記憶の社会的枠組み』（1925）で社会学においてはじめて記憶理論を提唱したことで知られる。

アルヴァックス理論の特徴は，記憶は脳などの物質や無意識に保存されるという考え方を否定し，ふつうきわめて私秘的に思われる記憶現象を，きわめて社会的・集合的で意識的な現象とみなす認識にある。こうした議論はベルクソン哲学への批判を軸にして展開される。アルヴァックスは自らの立場を，ベルクソンから区別して，〈記憶は外部から私に呼び起こされる〉という命題で表現している。つまり，私の外部＝他者との出会いから始まる記憶論を志向する。こうした立場は，記憶が喚起されるのは，実際的であれ想像的であれ，人間以外のものを含む，他者から「問い」を投げかけられ，それに「応答」しようとするときだけである，という記憶観にもあらわれている。

だが，アルヴァックスの議論は記憶現象を意識的なものに限定する以上，「ふっと思い出す」のような，無意識的で日常的な記憶現象の適用外にあるという批判が当然ありうるし，実際，1920年代当時からそうした批判が向けられていた。

ところで，この困難は，現代の人文社会科学的な記憶研究が，無意識，とくにトラウマを論じるときにぶつかる困難と同型のように思われる。記憶の社会学に限定してみても，意識の外にある記憶としての無意識を論じるための視角は積極的には探究されてこなかったと言える。

人文知は過去の議論を引き継ぐことでしか前進しない。アルヴァックスが躓いた地点にいまも躓き続けているのだとすれば，社会学はトラウマ的記憶を含めた無意識の問題を経由して，記憶一般を語り直す契機を探る必要がある。

その手掛かりはアルヴァックス理論それ自体の中にも見出しうる。そのひとつは，アルヴァックスがベルクソン哲学だけでなく，フロイト精神分析を中心に，当時最新の「記憶の科学」の知見を多く参照しているという事実にある。なかでも，彼が戦傷失語症に関する神経学の議論を重要な参照先としたうえで，失語状態とそれに併せて起こる記憶喪失状態とを，器質的な障害ではなく，個人と集団の関係に起きた変質が引き起こすディスアビリティとみなしている点は興味深い。アルヴァックスは〈われわれは記憶が喚起される前に，記憶について話している〉とも述べている。

そのうえで重要なのは，アルヴァックスが，「体験していない過去を思い出す」という，体験者／非体験者をリジットには区別しえないような事態を想定していることであり，それをどう評価するのかということである。

アルヴァックスの躓きを読み直すこと。そこには，トラウマ的記憶は語ることができないというグラウンドゼロの失語状態に向けた，一種のトラウマ論の可能性が開かれている。

（たけうち・たもつ　法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）